

保育における二人称的アプローチ①

「二人称的アプローチ」とは

佐伯 胖
(大学教員)

「ドーナツ論」

私は一九九〇年頃から、「学び」や「発達」に関して「ドーナツ論」というおかしな呼び方をしている考え方を提唱してきました。

「ドーナツ論」の原型は、私がコンピューター・サイエンスとかかわっていた一九八〇年代の後半に、ハイテク機器の「使いやすさ」に関する理論として提唱したものです。機器の「人に優しい」側面（第一接面）と「有効な仕事をする」側面（第二接面）の両方の役割と両者の関連づけの重要性を強調した理論でしたが、教育関係の仕事をするようになってから、この理論は「人や子どもとのかかわり」についての理論となりました。つまり、人は「自分の身になってくれる」他者（YOU的他者）と親しみ（それが第一接面）、YOU的関係を深めることを通して、文化の実践世界に参加する（それが第二接面）ようになる、ということを図式で表したところ、その図式がドーナツに似ていたことから、「ドーナツ論」と名付けたのでした。

ところが、二〇一〇年頃に、当時勤めていた青山学院大学の同僚である高木光太郎教授から、

「佐伯さんのドーナツ論に似たことを言っている人がいるよ」と言われて、Vasudevi Reddyの著書 *How Infants Know Minds* (直訳：乳幼児はいかに心を知るか) を紹介されました。

読み始めてすぐ、この本は確かに「ドーナツ論」に似た議論をしていることがわかりました。特に、私のドーナツ論でいう「YOU的にかかわり」(第一接面)のことを、「二人称的にかかわり」と呼んでいるのです。ただ、著者のレイディさんは、その「二人称的にかかわり」について、ドーナツ論よりもはるかに深く、根源的などころを論じており、しかも、その「二人称的にかかわり」という観点から、乳幼児の心の世界がいかに多様で面白く、まさに「人間そのもの」の本質が備わっているかを、これでもか、これでもかと、興味深いエピソード付きで説明しているのです。ただ、私がレイディさんの本で感銘を受けたのは、レイディさんは「二人称的にかかわり」について、発達心理学を含む人間科学全般でいわば「標準的に」取り入れられている「三人称的にかかわり」との対決をはっきり表明している点でした。そこで私は、講演や雑誌原稿などで、レイディさんの研究を盛んに紹介していたのですが、そのことがミネルヴァ書房編集部(西吉誠さんの耳に入っただけ)から盛んに「翻訳されてはいかがですか」との誘いをかけられました。私も、この本の翻訳ならば、ドーナツ論を提唱してきた手前、この私がやるべきだと思っただけで、誰の紹介も経ずに、レイディさんのホームページから知った彼女のメールアドレスにいきなり、「翻訳させていただきます」とお願いのメールを出しました。もちろん、私自身が何者であるかについて、簡単な経歴は添えておきましたが、どうなることかと案じていましたところ、それほど間を置くこともなく、数日して快諾の返事を頂きました。翻訳作業はかなり難航でしたが、著者とは気軽な電子メールでのやりとりを重ねて、なんとか翻訳して出版したのが、『驚くべき乳幼児の心の世界―二

人稱的アプローチ」から見えてくること―」（ミネルヴァ書房 二〇一五年）です。

翻訳書のタイトルが原著のタイトルを直訳したものでないということについては、レイディさんのお許しを得ています。レイディさんは、原著のタイトルは出版社が決めたタイトルで、あまり気に入ってはいなかったが、佐伯の訳書のタイトル（その英訳をお知らせした）のほうがはるかに良い、と言ってくださっています。

「二人称的アプローチ」

レイディさんによると、私たちが人と「かかわる」際に、以下の三つのかかわり方をするとしています。

1. 一人称的かかわり (First-Person Approach)
対象を「ワタシ」と同じような存在と見なす。「ワタシならどうする」を、対象にあてはめる。
2. 二人称的かかわり (Second-Person Approach)
対象を「ワタシ」と切り離さない、個人的関係にあるものとして、親密にかかわる存在と見なす。対象と、情動を含んだかかわりを持ち、固有の名前を持つ対象、対象自身が「どのようであろうとしているか」を聴き取ろうとする。
3. 三人称的かかわり (Third-Person Approach)
対象を「ワタシ」と切り離して、個人的関係のないものとして、個人とは無関係な（モ

ノ的な) 存在と見なす。傍観者の観察から「どうすると、どうなるか」を「客観的」に対象を調べ、そこから客観的法則(ないし理論)を導出し、それで説明する。

もちろん、ここでレデイさんが大切だとするのは「二人称的かかわり」で、「ドーナツ論」で大切としてきた第一接面での「YOU的かかわり」と極めて似た考え方をしていると、私なりに解釈しているものです。それについては次回から丁寧に解説していく予定です。

ただここで、はつきりさせておきたいことは、「二人称的アプローチ」と「一人称的かかわり」の違いです。右に挙げた「二人称的かかわり」は、私たちの「目の前にいる」他者とのかかわり方の一つを指しますが、「二人称的アプローチ」というのは、「子どもと保育者のかかわりをどのように(エピソードなどで)語るか、どのように研究するか」というときに、そこに生まれていく(あるいは生まれていない)「二人称的かかわり」に最大限の注意と関心を寄せて探究する、という私たちの「知ろうとする営み」を指しております。

したがって、本「保育エッセイ」も、基本的には「二人称的アプローチ」で語っていききたいと思っております。